

小学保健ニュース

★定期刊行物は終わる期間を予定しない刊行物です。年度が替わりましても、購読中止のお申し出がない場合、引き続きニュースをご送付申し上げます。
★著作権法により、本紙の無断複写・転載は禁じられています。

少年写真新聞社のホームページ

<http://www.schoolpress.co.jp/>

アルコールが 子どもに与える影響

独立行政法人国立病院機構 久里浜医療センター
教育情報部長 真栄里 仁

脳への影響

大量飲酒は、60もの疾患に関係しており、中でも問題となるのが脳への影響です。アルコールによって、感情や欲求が抑えられなくなったり眠気を引き起こしたりするだけではなく、長期間の大量飲酒で、脳萎縮をはじめとする様々なダメージを脳に与え、認知機能低下や性格変化などの原因ともなります。

また大脳だけではなく、バランス機能をつかさどる小脳もダメージを受け、歩行障害、上下肢の協調運動障害などの原因となります。特に思春期後期は神経回路が整理される時期であり、この時期の飲酒は、脳により大きな影響を与える可能性があります。早期にアルコール依存症を発症した若年アルコール依存症では、未成年から飲酒を開始していることが多いのですが、既に20代で脳萎縮が始まっています。

急性アルコール中毒のリスク

子どもはアルコールに慣れておらず、かつ「イッキ飲み」などの危険な飲み方を好む傾向があり、急性アルコール中毒が発生しやすくなります。東京消防庁管内の、急性アルコール中毒による搬送者の約半数が、30歳未満

の若者で占められています。

アルコール依存症

子どものうちから飲酒し始めると、成人以降に飲酒し始めた場合と比べて、アルコール依存症のリスクが2倍以上高くなり、特に15歳以前の飲酒では3倍以上に増加します。また、若くして依存症になったケースでは、断酒に成功するのは10%程度と、治療成績が極端に悪いです。

性ホルモン

大量飲酒は男性に対しては男性ホルモンを低下させ、女性に対しては女性ホルモンを低下させ、インポテンスや生理不順などのさまざまな性機能障害を引き起こします。特に、思春期以前の飲酒では二次性徴を遅らせるといった影響がみられます。

ゲートウェイドラッグ（入門薬）

覚醒剤などの違法薬物乱用者は、最初からそのような薬物を使用するケースは少なく、多くがタバコやお酒から始まり、違法薬物へと移行しています。そのため、薬物乱用のゲートウェイドラッグ（入門薬）として未成年の飲酒や喫煙禁止を徹底することは重要です。

そのほかの影響

成人を対象とした調査では、少量の飲酒（1日当たり純アルコール20g程度）で、心筋梗塞などの循環器系の疾患を減少させることで死亡率を下げる可能性が示唆されており、「Jカーブ効果」として知られています。一方、子どもではそのような効果は報告されておらず、むしろ、18歳、19歳時の飲酒量に比例して、その後の15年間の死亡率が上昇したという報告もあるなど、未成年者の飲酒は寿命を短縮化させる可能性があります。

また、上記の未成年者の飲酒量と死亡率の調査での死亡原因のほとんどは、暴行による死亡であり、飲酒と暴力との関係が推測されます。ほかの調査でも、学童の飲酒頻度と暴力を好む傾向との間には相関がみられることや、11歳～16歳の年代の泥酔は、恐喝のリスクが2倍、けんかでの受傷が5倍に上昇するなど、若年者の飲酒は暴力につながりやすいことが示されています。